日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　Vol. 25 No. 1, 111-115 (2024)

【研究論文】車椅子利用者偏見尺度作成の試み*

田中　堅一郎
日本大学大学院総合社会情報研究科
小林　敦子
日本大学大学院総合社会情報研究科後期課程修了

An Attempt of Developing Measurement on the Prejudice of Wheelchair Users

TANAKA Ken'ichiro
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies
KOBAYASHI Atsuko
Ph.D., Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

This study developed a scale to assess prejudice against wheelchair users. In a preliminary study, we conducted semi-structured interviews with a wheelchair user to explore the prejudices and discrimination she experienced. Based on these interviews, we created ten preliminary items. We then administered a Google Forms survey with these ten items to graduate and undergraduate students attending lectures at one of the author's affiliated universities (N = 258). Of these, 76 participants completed the survey. We developed the Wheelchair User Prejudice Scale, which comprises six items with an alpha coefficient of .718. The wheelchair user prejudice score consisted of the total score for this scale. The results indicated no significant gender or age differences in the responses to this scale.

日常生活の中でわれわれが目にする車椅子利用者は、様々な理由で車椅子を利用している。「様々な理由」には、精神障がい、身体障がい、運動障がい、発達障がいなどがあげられるが、それ以外にも重篤な内臓疾患や、骨折や外傷、靭帯損傷等による歩行困難といったことも含まれる。例えば、著者の一人は（現時点では身体的には健常であり日常的に車椅子は利用していないが）かつて尿管結石を悪化させて腎盂腎炎で緊急入院した折に病院での歩行がままならず、急遽車椅子を用意してもらい、手術室への入退室をはじめ病室の出入りにも車椅子を利用したことがあった。ただ、こうした緊急時における車椅子の使用はともかく、日常の中で頻繁に車椅子を利用するのは、様々なハンディを抱えている人々であろう。

ところが、残念なことに日常的に車椅子を利用しているというだけで、その利用者に対して偏った見方をされるのは昔も今も変わらない。例えば、ある人が車椅子を利用しなければ移動できない理由が一時的であれ恒常的であれ、歩行が困難であることがその人の機能に甚大な欠陥があるかのように見られることもある。あるいは自分の足で歩けない人が車椅子を使って移動していること自体が多くの他者に迷惑をかけ、時間のロスに繋がると考えられることすらある。

このように、車椅子利用者への偏見は社会的ステ

* 本研究は、学術研究助成事業の基盤研究（C）（研究課題番号；23K02838、研究代表者：田中堅一郎）の支援を受けた。

ィグマを帯びており、社会問題の一つとしても論考できるにもかかわらず、車椅子利用者に対するネガティブな態度（ステレオタイプ、偏見、差別）についての研究は決して多いとはいえない。学術研究のデータベースである ScienceDirect を論文題目、アブストラクト、キーワードを対象に検索した結果、キーワード“wheelchair”で検索された 2,897 件の論文のうち、“discrimination”に関する論文は 19 件、“stereotype”は 8 件、“prejudice”では 1 件のみしか検索されなかった[1]。CiNii の検索結果でも、「車椅子利用者」237 件の論文のうち、「差別」に関する論文は 4 件、「偏見」は 1 件、「ステレオタイプ」に至っては 0 件であった[2]。

障がい者を対象にした調査や研究まで広げるならば、障がいをもつ人々を対象とする比較的規模の大きい調査は日本でも行われるようになった（例えば、障がい者総合研究所, 2017; 内閣府, 2023）。また障がい者に対する偏見およびステレオタイプの測定に関する研究では、最近は調査法や面接法を駆使した顕在的な側面のみならず、潜在的態度検査（Implicit Attitude Test; IAT）を用いた潜在的側面に焦点を当てた研究も行われている（例えば、栗田, 2015; 栗田・楠田, 2014）[3]。しかしながら、車椅子利用者を対象とする偏見やスティグマに関する測定尺度に関する研究は、日本はもとより、世界的にみても関連研究が殆ど見出せない。

そこで本研究では、車椅子利用者に対する偏見を測定する尺度（車椅子利用者偏見尺度）の作成を目的とする。

1. 予備調査

1.1 方法

1.1.1 手続き 尺度項目候補の収集にあたり、車椅子利用者への偏見や差別の内容を把握するために、それを経験してきたと考えられる車椅子利用者に対して半構造化面接を行った。インフォーマントである車椅子を利用している著者らの知人 A に対して 2024 年 5 月に調査の趣旨を伝え、インタビューへの協力について、事前に承諾を得て、その後メールにより質問を行った。質問の内容は、「今まで、人から偏見を感じたり、嫌な思いをしたりしたことがありましたか。また、あったとしたら、それはどのようなことでしたか」であった。インフォーマントからはメールで回答してもらった。

1.1.2 調査回答者 車椅子を利用している著者らの知人 A（K 県内の医療施設勤務の女性）

1.2 結果

面接調査でインフォーマントからの回答を要約すると、以下のとおりとなった。

偏見を感じたのは「何もできないだろう」と一方的に決めつけられたことであった。直接的にそのような言葉を投げかけられたことは回数にすれば少なくても、前提として「車椅子ユーザー＝障がい者、手助けがないと生活できない人」という思考が働いてしまう方が多いと感じている。

親切心からの行動だと思うが、自分でできることをできないと思われて手を出され、かえって危険な目にあってしまった経験をした。自分でできることまですべてしてしまわれることは苦痛である。ただそれは、自分なりのペースや行動方法、ルーチンがあり、自分の生活をしたいという思いがあるので、余計にそう感じるだけなのかもしれない。

車椅子利用者は、日常生活を営む上で、どうしても物理的な制限や機能的制限、バリアがあるので、人の手を借りたり、協力していただかなければならない場面が多い。だからこそ、自分でできることはできるだけ自分でやりたいと考えている障がい者は割と多いと思う。

ただ、私たち障がい者には声をかけづらい、どう助けてあげたらいいかわからないと周囲の人に言われたこと経験から、自分たちも知ってもらう努力をしなくてはいけないのだと思っている。

[1] 検索日時；2024 年 5 月 29 日。

[2] 検索日時；2024 年 5 月 29 日。ちなみに、CiNii で検索された論文のうち心理学領域の研究は「偏見」で検索された 1 件（小川, 2022）のみであった。

[3] また、ヘイトスピーチに代表される公然と行われる古典的偏見だけでなく、障がい者に対する間接的な形で表立って見えにくい象徴的偏見にも注目されている（例えば、清水・ターン・橋本・唐沢, 2022）。

これらの内容から、車椅子利用者への偏見は、直接的な言動となって現れるものもあるが、車椅子利用者は何もできないといった偏見を前提として良かれと思って行われる行為も含まれることが推測される。また、インタビューでのやりとりをとおして、車椅子利用者と一口に言っても、様々な状況の人がいて、「できること、できないこと」の内容も様々であることに気づかされた。それは、健常者と言われる人たちが多様であるように、車椅子利用者もまた、多様であることを示している。

2. 本調査

予備調査で実施された面接調査でのインフォーマントの回答に基づいて、車椅子利用者偏見尺度を構成する項目を作成し、項目群で構成される尺度の信頼性と回答者の属性からみた特性について検討する。

2.1　方法

2.1.1　手続き　著者の一人が出講している首都圏の2つの大学での学部受講生(受講者数はF大学: 58名、N大学: 98名)、および著者の一人が所属していた東京都内の社会人大学院の修了生のべ102名に対して、Google Formsで調査項目に回答するようメールで依頼した。依頼は2024年5月30日、5月31日、および6月3日に行った。

2.1.2　調査回答者　Google Formsに2024年 6月15日までに調査項目に回答した76名（男性；39名、女性；34名、性別無回答；3名、年齢：10代；20名、20代；10名、30代；5名、40代；11名、50代；20名、60代；8名、70代以上；2名）が分析の対象となった。

2.1.3　調査項目　予備調査で行われた面接調査のインフォーマントからの回答を踏まえて、車椅子利用者偏見尺度を構成する項目候補 10 項目を作成した（付録参照)。項目は著者の一人が原案を作成し、もう一人の著者が内容をチェックした。

2.1.4　手続き　Google Forms上に教示文と調査項目が掲載された URL を設定し、回答者は指定された URL から PC やスマートフォンを用いて回答した。教示文は、以下のように示された：「次の質問は、車椅子ユーザーに対して、普段どのように感じているかを問うものです。あなたの考えに一番近い番号にチェックを入れてください」。

2.2　結果

2.2.1　測定尺度の信頼性係数　まず項目候補 10 項目について、クロンバックのα係数が算出された[4]。その結果、α＝.660 となった。各項目について項目が除外された場合のα係数を算出したところ、項目番号3、7、10を除外するとα係数が上昇した。そこでこれら3項目を除く7項目についてα係数を算出し（α＝.693)、さらに残った7項目について各項目が除外されたときのα係数を算出すると、項目番号4を除外したときのα係数が.718となった。これら6項目を対象に主因子解による探索的因子分析を行った結果、第1因子の因子寄与率が42.18%となった。これらの結果から、項目番号3、4、7, 10を除く6項目による尺度としての整合性はそれなりに高いと見なされるため、本研究では車椅子利用者偏見尺度を構成するこれら6項目を合算した値を車椅子利用者偏見尺度得点とした。

2.2.2　構成項目の基本統計量　車椅子利用者偏見尺度を構成する6項目についての基本統計量（平均値、標準偏差）が表1に示される。また、尺度値のレンジは14から30、平均値は24.97、標準偏差は3.31となった。尺度値の頻度分布（ヒストグラム）が図1に示される。得点分布と正規曲線をみるかぎり、正規性は担保されていると見なされる。この尺度の得点が低いほど車椅子利用者に対する偏見が強く、得点が高いほどその偏見が低いことを示している。

2.2.3　回答者の属性から見た測定尺度の特性　**性別**：車椅子利用者偏見尺度の得点の性差について、性別への回答がなかった 3 名を除く 73 名を対象に平均値、標準偏差を算出したところ、女性：M=25.12、SD=3.58、男性：M=25.95、SD=3.21 となった。性別に算出されたこれらの平均値について t 検定を行ったところ、t=0.167 (p=.684, Cohen's d=.050)となり、有意差は認められなかった。**年齢層**：年齢層別の車椅子利用者偏見尺度得点（図2）を見ると、10代・20代の得点が低い傾向が見られるが、年齢層別の差異に

[4] その際、逆転項目の評点については1を5、2を4のように反転させて分析を行った。

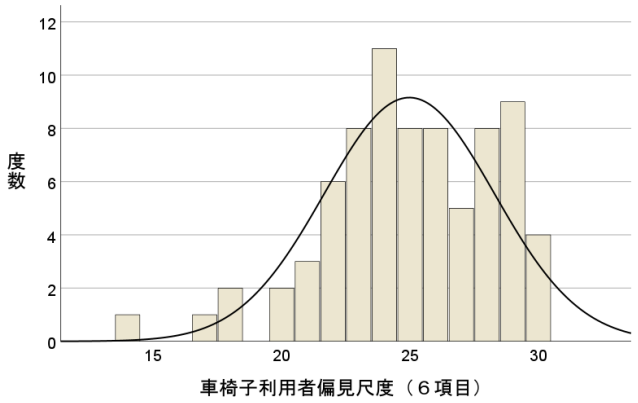
ついて一元配置の分散分析を行った。その結果、$F(6, 69)=2.132$ ($p=.061$）となり統計的に有意とはならなかった。この結果から、回答者の年齢層で車椅子利用者偏見尺度得点には差がないとみなされる。

表 1　尺度を構成する項目の平均値、標準偏差

項目番号	平均値	標準偏差
1	3.78	1.05
2	4.00	1.01
5	4.51	0.74
6	3.71	0.92
8	4.88	0.33
9	4.05	0.88

注：項目番号は付録に対応している。なお、逆転項目（項目番号 5、8）の評点は反転されている。

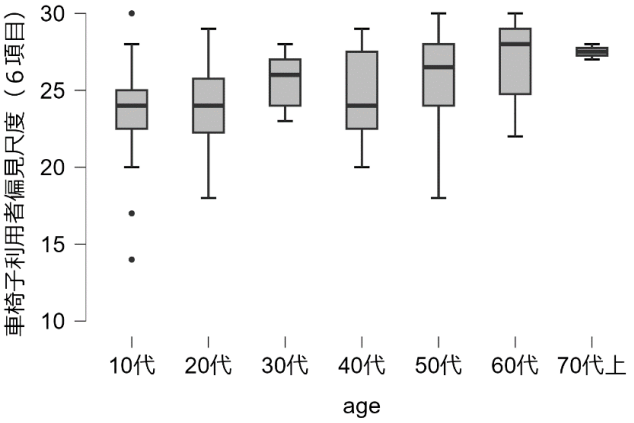
図 1　車椅子利用者偏見尺度得点の頻度分布と正規曲線



2.3　考察

本調査では、予備調査の結果を基に、車椅子利用者偏見尺度を構成する 10 項目を作成し、このうち信頼性係数が相対的に低かった項目を除去する行程を繰り返して、6 項目になったときの信頼性係数が.717 となり、さらに 6 項目についての因子分析の結果から 1 因子のみによる説明力（因子寄与率）も 40%を上回った。これらのことから、本研究で作成された 6 項目から構成される車椅子利用者偏見尺度の尺度としての整合性としては許容可能な値とみなされる。また、この尺度得点について回答者の属性（性別、年齢層）による差異は有意とならず、車椅子利用者に対する偏見は性別や年齢によって違いは認められなかった。

図 2　年齢層別に見た車椅子利用者偏見尺度得点



3. 全体考察

日本ではこれまで障がい者への偏見に関する研究は行われていたものの、車椅子利用者に対する偏見やステレオタイプについての研究は少なく、車椅子利用者に対する偏見を測定する尺度に関する研究も見いだせなかった。そこで本研究では 6 項目からなる車椅子利用者偏見尺度を作成し、信頼性を検討した。その結果、α係数の数値と因子分析の結果からみて尺度としての整合性は担保されたと考えられる。ただ、再検査法といった尺度の信頼性の検討は行っておらず、さらなる信頼性の検討が必要となるだろう。

また、本研究で作成された尺度得点について、性別や年齢層といった回答者の特性による差異についても検討されたが、本研究では回答者数が少なかったため、統計的検定に馴染まなかったかもしれない。この点については多くの回答者数を確保して検討すべきであろう。

さらに、当該尺度と関連すると思われる障がい者への偏見といった測定尺度を用いた妥当性の検討も行われなかった。妥当性の検討については複数回の調査実施が必要となるので、この点についてもさらなる検討が必要である。

なお本研究では、車椅子利用者への偏見に絞って

尺度を構成したが、施設の段差の解消やエレベータ設置などの整備といった、バリア・フリーやノーマライゼイションに対する社会的態度を含んだ項目による尺度作成についても、今後検討されるべきだろう。

4. 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

栗田季佳 (2015).　見えない偏見の科学　心に潜む障害者への偏見を可視化する　京都大学学術出版会

栗田季佳・楠田　孝 (2014).　障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望　教育心理学研究, *62*, 64-80.

内閣府 (2023).　障害者に関する世論調査（令和 4 年 11 月調査）　Retrieved June 13, 2024 from https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-shougai/

小川翔大 (2022).　障害者に対する顕在的・潜在的態度が身体障害学生との友人関係に及ぼす影響：混合計画法を用いた交流過程の分析　発達心理学研究, *33*, 123-136.

清水佑輔・ターン友加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり (2022).　象徴的障害者偏見尺度日本語版（SAS-J）の作成　心理学研究, *92*, 532-542.

障がい者総合研究所 (2017).　障がい者に対する差別・偏見に関する調査　Retrieved June 13, 2024 from https://www.gp-sri.jp/report/detail031.html

付録　車椅子利用者偏見尺度の初期の構成項目

1. 車椅子に乗っている人は、他人の介助なしには何もできない。
2. 車椅子に乗っている人には、なるべく関わりたくない。
3. 職場や趣味のサークル仲間に車椅子の利用者がいたら、積極的に声を掛けたい。＊
4. 車椅子利用者は、皆、同じような悩みを持ち、似たような生活を送っているものだ。
5. 車椅子に乗っていても、独力でできることはたくさんある。＊
6. 車椅子の利用者は、いつも人に頼って生きている。
7. 車椅子利用者も、そうでない人も、人生に楽しみを見出して前向きに生きることができる。＊
8. 車椅子利用者も、そうでない人も、皆それぞれ他人からは見えない悩みを抱えて生きているものだ。＊
9. 車椅子利用者は、人から常に守られなければ生活できない、かよわい存在だ。
10. 車椅子に乗っていても、趣味やスポーツを存分に楽しむことができる。＊

注：＊印の項目は逆転項目を意味する。評定方法は、5 件法（1. とてもそう思う、2. 少しそう思う、3. どちらともいえない、4. あまりそう思わない、5. 全くそう思わない）である。

(Received:August 20, 2024)
(Issued in internet Edition:September 2, 2024)